

西表島船浮のシンガーソングライター
池田 卓さんに聞く

島に暮らすということ

歌 手としては、2000年にデビューして今年で十四年目になります。

歌手を目指すようになったのも、いずれは船浮に住みたくて、何か帰れるものをやりたいなというものがあつたんです。自分の中にあるものと、それは島でもできるなど。

最近本土でのイベントが多く、通常朝の7時に自分の船で船浮を出て、午後3時に東京に着いています。これだけ交通手段等が充実すれば、全く僕は不便を感じていません。

毎 年4月に開催している「船浮音祭り」に今年は680人も来てくれました。普段、船浮に来てくれるのは一日五、六名かな。

祭り当日は、対岸の白浜港からチャーター船を含め、四隻がビストン運航して、あとは石垣から200名乗りの直行便が来ますね。西表ではバスも足りないし、大変ですね。難しいです。



西表島には、陸続きでありながら陸路がないために、船でしか行くことが出来ない船浮と言う集落があります。生まれ故郷の西表島船浮に暮らすシンガーソングライター池田卓さんは、島への思いを歌にして全国各地で音楽活動するだけでなく、ご両親と一緒に海運業や観光業もしています。池田さんに島での仕事や生活などの魅力を語ってもらいました。

船浮に泊まりたいという人もいますけど、キャンプがないので、白浜や西表の他の地区に泊まる人も多いんです。今では隣村まで一杯になるのが広がっていつて、ほかの地域からも感謝されるようになったことが一番うれしいんです。

本場に「船浮音祭り」をきっかけに僕は船浮を知ってもらいたくて、一番は観光客もそうですが、周辺離島の人に来てもらいたいお祭りでもあるんですよ。(船浮って近くて遠いというか、来たことない人が多いので。)

それに、船浮を知っていたらと、西表の民宿の人からも、何かのときに紹介してもらえますし、あそこの海はきれいだよって言ってもらえると思います。

「船浮音祭り」には、なかなか西表では見られないような人をゲストに招いています。子供が行きたいって言うから親も引っ張られて行くかなって思っ

てくれればいいと思います。

開催時期を4月の第3週末にしたのも狙いがあったって、伊平屋のムーンライトマラソンとか新しい祭りは全部お客さんがいない時期なのを見て、南風(ばいかじ)に変わって過ごしやすいうりずんの季節の一番いい時期に来てもらえないのはもったいないと考え、この時期にしました。

船浮海運は、僕が小さいころから父が運航していたので、小学校の文集にも「将来は船浮海運の船長」と書いたぐらいですけど、当時は本当に知られていなくて、一日一人か二人来るか来ないかという状況でした。

船渡しでは飯が食えないから民宿もしながら、陸路がつながっていないこの村は、この船を止めたらなくなってしまうという親父の強い思いがあつて、ずっと船を走らせてきました。

僕が小学校1年生の時に会社組織になつて国の離島航路補助で助けてもら



(有)船浮海運の定期船「ニューふなうき」

えるようになりましたが、それまでは
本当に大変でした。

今でこそ、こういう何もないところ
が好きな方も増えてきて、インターネッ
トが普及したことで船浮にもここ最近
は来られる方も多くなって、今は県外
の観光客が七、八割です。一方、県内の
人は身近なため、いつでも行けると思っ
ているのか、なかなか離島に行かない
ですね。

最近では、島の人も結構乗っていて、
この辺では一家に一隻の船はあるけ
ど、年配の方や、ガソリン代の高騰に
より、定期船の方が安いという人もお

ります。

それに、僕が島を出ている間に浮き
栈橋ができてフラットになり船の乗り
降りが楽になり助かってます。

昔は大潮の干潮時には、もうじいちゃ
ん、ばあちゃんの乗り降りや荷物の積
みおろしが大変でした。

船

浮海運は、親父と僕と、対岸の上
原に住んでいる船長さんと事務
員さんの4人で運営しています。

島に帰ってきて4年目で、小型船舶
免許と船員手帳も取得し、操船もでき
るのですが、今は係留のためのロープ
を取りに行くのが仕事で、使うガソリ
ンの量とエンジンの仕組み、航路とか
いろんなことを勉強中です。

免許は沖縄水産高校で取得し、夏休
みなどは親父の手伝いをしていました。
船や海のことは小さいときから習って
いたので免許取得は簡単でした。

沖縄水産高校では野球をやっていた
した。学科は海洋科じゃなくて総合学
科でしたが、それでもいろいろ免許が
取れるので水産高校はやっぱりいいで
すね。

いずれは社長として頑張っていかな
ければと思いますが、船浮にいない日
もあるので船長には多分難しく、僕
の場合は宣伝係という感じです。

僕が何で島に帰ってきたかという
と、海運業の跡継ぎは親父がリタイア

した後でもできるんですけど、今は空
いた時間で、たけのこをとって、イノ
シシを捕りに行って、イカや魚を釣つ
たり、貝を採ってきたり、ここでしか
できないことを親父といつも楽しんで
いるんです。イノシシの罠の仕掛け方、
通る場所とか、もう全てにおいて親父
は全然レベルが違うんですよ。山の道
も昔はたくさんあって、ちよつと入れ
ば迷いますが、親父を追って歩きな
がら覚えていきます。

そのため、親父が元気なうちにと、
親父が六十才のときに歌手活動がちょ
うど十周年だったので帰ってきました。
歌は十年で土台はできているはずだか
ら、平日はここで親父と修行をしながら、
ここからちよくちよく歌いに行け
ばいい。今ちようど自分が描いたとお
りの日々で、充実しています。

今

船浮には四十人住んでいて、十
人弱は先生で、それから真珠の養
殖と海んちゅと船浮海運に、あとは観
光業ですね。民宿も2軒あります。

仕事はいっぱいあったほうが安定し
ますし、今は農業を始めたかなと思っ
ています。

昔

は山やイダの浜まで全部畑で、米
を作っていましたけど、今は農
家が一人もいないんですよ。村には豊
年祭があつて、一番のお年寄りの楽し
みで生きがいというか、祭りに一番力

を発揮するのもお年寄りだし、そうい
う祭りを廃れさせないためにとも思っ
て、去年から豊年祭に使う分の米を作っ
ています。

それから、はちみつとコーヒーもつ
くり始めました。普通の野菜を船浮で
作っても輸送費や鮮度の面で不利なの
で、保存が効いて、船浮産ということ
が価値になるものと考えたんです。

インターネットなどで調べているん
ですけど、やってみると何でも難しい
ですね。5万円位で何万匹ってハチと
箱を一式買って、初め2カ月ぐらいは
順調で蜜もつくっていたのに、ハチの
世話をするタイミングが悪かったのか
怒っていなくなりました。悔しいから
勉強し直して、今は2回目のチャレン
ジ中です。

はちみつを売ろうと思ったなら絶対に
船浮の知名度が必要なんです。だから
船浮音祭りがメディアに取り上げても
らえるきっかけになればという、いろ
んな思いがあります。観光にも使える
し。

今

では船浮生まれ、船浮育ちの青年
は僕といとこのにいにい(兄貴)
しかいないんです。五十年後にも船浮
にいてであろうこの二人で何かしてい
くしかないの、何ができるかと今ちよ
うど色んなものに挑戦しているところ
です。

観

光では、新石垣空港ブームにあやかって、川や滝へ行く日帰りツアーを始めました。いとこは船浮地区に炭鉱があった頃の昔のことも紹介できるガイドをしています。

僕はこれを仕事として成り立たせて、人を雇えるようにするとか、また、やりたい人がいるならば、こんな仕事で船浮でできると示して、もうちょっと人を増やしたいという思いがありますね。

今

のところが夏場の民宿は一日一、二組いるかなという感じで、全くない日もありますし、冬場だと本当に一、二週間お客さんがゼロというのは普通です。

外国の人も、年に四、五組ぐらい泊まることはあります。言葉が通じなくても問題ないですけど、やっぱり民宿に一人はしゃべれる人がいたほうがいいと、去年からおもてなしのために英語を移動時間とか使って勉強し始めました。

船でも、特に英語で案内しているわけではないですけど、外国人がネットで調べてきて乗っていますね。外国人には船長さんがいつもチケットに帰る時間を書いてくれるんですけど、全部は難しくても、港での案内看板くらいは英語にしたいと思っています。

西

表は世界自然遺産の候補地になりましたけど、僕はちょっと早過ぎるって思いがあり怖いんです。世界遺産に匹敵するような自然はあるとは思いますが、受け入れる体制ができていないのです。

タクシー運転手などで外国語を話せる人もいないですし、両替できる場所もありません。これでは世界から観光客を呼んでも、身動きがとれないからあの島は行かない方がいいと言われるだけですからね。

今

は人数ばかり気にして、人数を確保するために値段を落として、結局は儲けがないみたいな話も聞きます。こういうことでは絶対質が落ちるので、来てくれる観光客

にも申し訳ないんじゃないかと思っています。

あとはごみをどうにかしないといけない。ここまで来るヨーロッパの人は自然が好きで敏感だから、海岸の漂流ごみの多さ、休日の夕方には港やトイレにごみの山ができるのを見ると、絶対がっかりして帰ります。日本ではまだ来る人も迎える側も、ちょっとレベルがあそこまで達してないで

すね。

僕もツアーの最後の5分はみんなで砂浜の漂流ゴミを拾うようにしているけど、そういうことをしたい人たちは沢山います。

みんなで協力しないとできない話ですし、きちんと考えた方がいいと思うんです。

それに、みんな観光客が来るから色々と言っていますが、自然を守るためにもしかしたらイノシシを獲るのに山に入れなくなることもあると思うし、何か一つ守ろうと思って別のことが制限されるみたいなことも多分にあると思うので、そこもちゃんと考えていかなければいけないと思っています。

こ

れからは、ここにいてる人がこの島のよさを心から知っている、みんな楽しそうにしていることが大切になるんでしょね。こうやって不便なところに住んでいる人たちが何でこんなに楽しそうに生きてるんだろう、輝いてるんだろうってなると、みんなここに興味を持ってくれると思うし、こういう人たちいると前向きな考え方にもなるから、自分もそんな人たちに囲まれて住んでみたいって思うようになるでしょう。

変わらないものに価値がついている時代なので、船浮は今からどんな価値が出てくると思うし、僕も発信していきたいと思っています。



社長で師匠でもある父池田米蔵氏と

いけだ すぐる
池田卓 プロフィール

1979年 沖縄・西表島船浮出身。
中学・高校は野球に没頭し、19歳の夏、島の芸能祭に参加したのをきっかけに本格的に芸能活動を開始。
2000年10月、「島の人よ」でCDデビュー。
2005年、「心色」で全国デビュー。
2007年、故郷・船浮にて音楽イベント「船浮音祭り」を企画。
2011年、活動拠点を船浮に移し、生まれ故郷から「島への思い」を発信している。